

湯築城だより 1

YUZUKIJO NEWS Vol.1

湯築城復元整備区域 オープン!!

中世伊予国の守護河野氏の居城であった湯築城跡が復元整備され、4月12日、道後公園内の復元区域と湯築城資料館がオープンしました。公園面積8.6haの敷地の中には、発掘調査の成果をもとに武家屋敷や土塁などを復元した区域を設け、資料館をはじめ4か所の展示施設が備わっています。

道後公園開園式には、加戸守行愛媛県知事をはじめ関係者約100人が出席しました。あわせて湯築城ボランティアガイドの委嘱状交付式も行われ、67名のボランティアガイドが誕生しました。12日午後から、湯築城資料館と公園内の復元区域が一般公開と

なり、オープン直後の週末には4,000人を超える来館がありました。



ゴールデンウィークのにぎわい

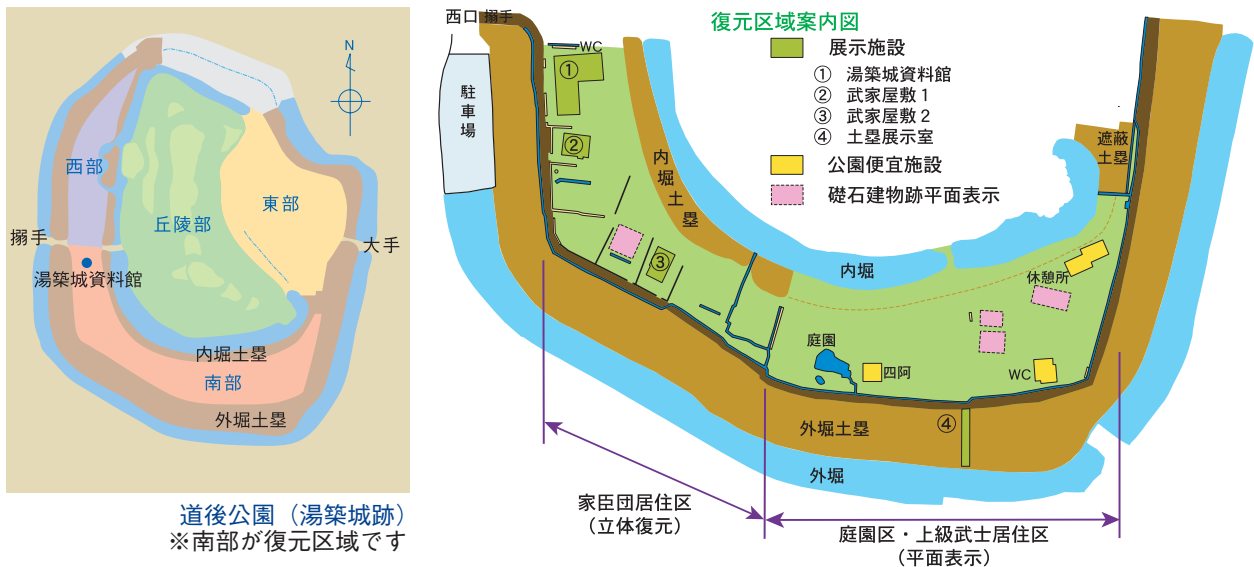


復元整備された区域

●発掘調査の成果と整備

1988年から行われてきた発掘調査によって、公園南部（旧動物園区）には小さな区画に分かれた家臣の居住区や、庭園をともなう広大な上級武士居住区が存在することがわかってきました。また、4段階ある遺構のうち、特に火災で焼失した2段階（16世紀中ごろ）と最終遺構面の4段階（16世紀後半）がよく残っていました。

整備では、西側の家臣団居住区では2段階の様子を立体復元し、東側の庭園区・上級武士居住区は4段階の遺構を平面表示しています。また、資料館、武家屋敷、土塁展示室などの施設を4か所に設けて、湯築城と河野氏の歴史や文化、発掘調査の成果などを展示しています。



●施設紹介

●湯築城資料館

発掘調査の成果を、実物の剥ぎ取り断面や遺構の復元、出土遺物やパネルなどで展示しています。また、模型と映像を組み合わせた公園案内や、河野氏の歴史や遺跡の復元過程の映像による紹介も行っています。

床には、城内で最も大きなごみ捨て穴が復元されています。中からは宴会などで使い捨てにされた1万点を超える素焼きの皿（土師質土器皿）が出土していて、その一部を忠実に再現しました。また、さまざまな輸入陶磁器や大きな備前焼の甕など、城内の武士たちの生活を物語る遺物も多数見ることができます。



湯築城資料館の展示



武家屋敷1の外観

中では当時流行していた連歌^{れんが}の様子を再現しています。また、屋敷内の調度品^{ちやうどひん}や道具も出土品や絵巻物などをもとに、当時の様子を再現してあります。



連歌の場面の再現



武家屋敷2の内部の展示

● 武家屋敷1 ● ● ● ● ●

家臣の居住区内に復元された武家屋敷2棟のうち、武家屋敷1は、発掘によって出てきた礎石^{そせき}の並びから間取りを推定し、建物内部の復元をしています。木材の組み方や使用する金具なども、中世の工法で復元を行っています。

● 武家屋敷2 ● ● ● ● ●

外観を復元、内部を展示施設として利用しています。

銭貨^{すずり}や硯^{いしうす}、石臼、火鉢や灯明皿といった多様な遺物の展示をはじめ、湯築城の生活を支えた職人や、湯築城の調査と関連の深い他の中世遺跡の紹介、また、発掘調査の歩みをまとめた映像など、多彩な展示内容となっています。

●土塁展示室●●●●●

外堀土塁を断ち割って、断面土層を観察できる展示室にしています。土を盛り上げてつくられた土塁の中に入って、土塁の規模を、実際に見て感じることができます。

発掘調査によって得られた多大な情報をもとに、現代によみがえった湯築城。出土した遺物を間近で見学したり、復元された建物から当時の様子を体感したり、遺跡を生かした歴史学習の場として、今後さまざまな情報を発信していきます。



土塁展示室

イベント紹介コーナー

湯築城『歩いて、見て、学ぶ』見学会

4月13日（土）、14日（日）には、道後公園（湯築城跡）開園イベント「湯築城『歩いて、見て、学ぶ』見学会」を開催しました。地元小学校の親子を対象とした見学会で、湯築小学校、道後小学校の5・6年生37人と保護者の参加がありました。

参加者には、地図を片手に湯築城の各所を歩いて巡り、クイズを解きながら湯築城について理解を深めてもらいました。途中、借景ともいわれる庭園の巨石をながめて俳句を一句ひねったり、城内各所に隠されたキーワードを集めて宝探しをしたりと、頭と体を使った見学内容となりました。そして、閉会式では、すべての場所を巡ってクイズを回答した全参加者に『湯築城豆博士』の称号が与えられました。広々とした城内を歩いて巡ると湯築城の規模がわかり、丘陵の展望台からは城の立地や城内の様子を見ることができて、参加者からも勉強になったと好評でした。また、ボランティアガイドの皆さんに、展示の説明を受けてクイズや宝探しのヒントを聞いたり、詠んだ俳句を見てもらったり、はじめて説明を受けた参加者も、丁寧な説明に満足して帰られました。



ボランティアガイドから説明を受ける親子づれ

参加の小学生にとっては、この道後公園が中世の城跡であったことをはじめて知る機会となり、身近にある遺跡として理解されるようになったかと思います。また、旧道後動物園を知っている世代の方は、動物園移転から十数年後、湯築城跡として生まれ変わって、再び公開されるようになり、子供のころ遊んだ公園や動物園を懐かしくも感じながら、親子で休日の一時を過ごされていました。

●出土遺物 ミニギャラリー●●●●●●●●●●

遺跡で発見された土器や陶磁器、石器、金属製品などの出土品を遺物といいます。湯築城跡からも多種多様な遺物が出土していて、破片数では25万点以上にのぼっています。

焼き物が最も多く、地元で生産された土師質土器と呼ばれる素焼きのものや、備前焼、瀬戸美濃焼などの国産陶器、また中国や朝鮮半島から輸入された陶磁器などが認められます。器種は、碗や皿など食器として使われるものが多く、ほかにも壺や甕のように貯蔵するために使ったもの、搗鉢すりばちのような調理用具、鍋や釜のように火にかけて煮炊きを使用するものもあります。また、守護の城という性格を反映して、座敷を飾るための高級な陶磁器も多く出土しています。金属製品は、鉄釘や鉄斧、銭貨や刀装具などがあります。また、石製品も臼、砥石、硯などが見られます。いずれも、城内の生活を多様に彩り、現代の私たちに当時の様子をありありと物語ってくれるものばかりです。



16世紀中ごろの家臣の屋敷から出土した遺物の一群

●中世を知ろう!

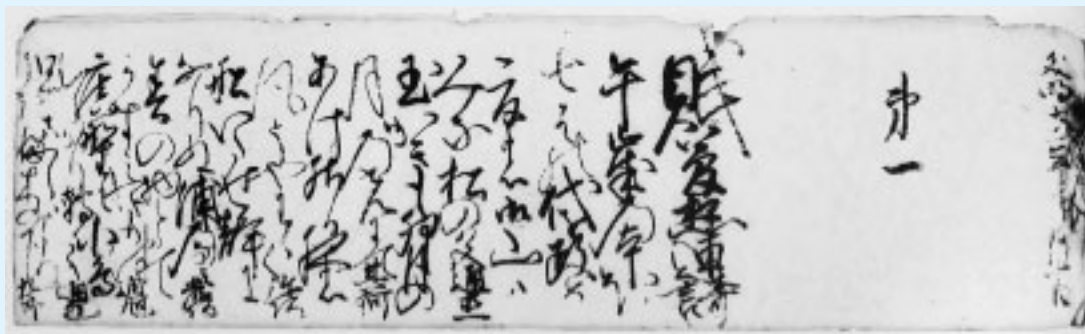
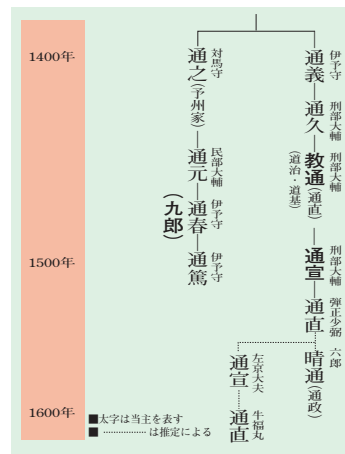
河野氏と連歌について

連歌とは

和歌から俳諧へと移る中間期に生まれた文学で、中世には和歌をしのぐ勢いで流行したといわれます。連歌は、複数の作者で上句（五・七・五）と下句（七・七）を交互に詠み続け、百韻（100句）を完成させる形を基本とします。前の句の意味や情趣から連想してその場で創作し、人の句を鑑賞しながら創作する連歌には、即興性と遊興性があり、人々を魅了していきました。また、連歌は変化を尊ぶ文芸であり、前の句と同じ意味や発想の繰り返しを避けるための式目という一定の約束事があります。連歌会では、式目や作法を指導し、一座全体を取りまとめる宗匠と、詠まれた句を書き留める執筆が存在しました。

中世には、連歌をはじめさまざまな都の文化芸能が、地方の豪族や武士たちの間にも広まります。

河野氏の中で、連歌に最も通じていたとされるのは、刑部大輔教通（通直）です。教通の生きた時代は応仁の乱など戦乱の続いた時代でありましたが、在京中に連歌を嗜んだといわれ、伊予帰国後に多くの連歌会を催しています。



大山祇神社蔵

重要文化財 大山祇神社法楽連歌
 文明十二年 卯月 千句 第一

<p>第一</p> <p>興行年月日 文明十二年卯月十日</p>		<p>題目 賦夢想連歌</p>		<p>発句 午歳の本ほ七えの代を政め (ママ)</p>		<p>脇句 夏の御山はみな松の色</p>		<p>第三 玉かきも卯月の月の光にて あけ残る夜の風そやわらく 船いたせ静かになりぬ浦のなみ 春の物とてかすみわたりつ 広(き)野に小鳥むらかり囀て 且さくらよりにほふ木の下</p>		<p>作者名</p> <p>通直 刑部大輔教通</p> <p>其阿 (宝蔵寺住職)</p> <p>彌阿 時宗僧</p> <p>巖阿</p> <p>通旭</p> <p>通包</p> <p>九郎 河野一門</p>	
---	--	--------------------------------------	--	--	--	---	--	---	--	--	--

左下の資料は、文明12(1480)年卯月(旧暦4月)に当時の湯築城城主であった教通(通直)が主催し、河野氏の氏神である大山祇神社に奉納された連歌です。

この連歌は、百韻(100句)を一巻として第十巻まで詠む千句の連歌で、その内の第一巻最初の部分です。賦夢想連歌と題するこの連歌は、夢にあらわれた神仏の教えによって生まれた句を発句(最初の一句)とするもので、発句は、会の主賓や宗匠が詠みます。その後、脇句(第二句)を会の主催者である教通(通直)が詠んでいます。続けて、道後宝厳寺の時宗僧や、九郎(河野通春)をはじめ河野氏一門の武士らも名を連ねていますが、中でも、其阿(そあ)や彌阿(みあ)はすぐれた連歌作者であるといわれています。

室町時代には、連歌師の活動によって連歌が地方にも普及するようになります。当時、宗祇など一流の連歌師が、京の将軍や幕府の上級武士、また地方の守護や戦国大名にも連歌を広めるため各地を巡り活躍していました。其阿や彌阿は、宗祇とも同じ連歌会に参加し、中央の連歌にもかかわっていたといわれます。

その時代に、伊予では、教通が中心となって連歌会を催し、河野氏一門や道後宝厳寺の時宗僧たちによって連歌が盛んに詠まれていたのです。

参考文献

- 乾裕幸・白石梯三『連句への招待』有斐閣新書 1980
- 和田茂樹編『大山祇神社法楽連歌』大山祇神社社務所 1986
- 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 文学』 1984

河野氏 が主催した 連歌会	
西暦(年号)	形式
一四四五(文安二)	百韻
一四八〇(文明一二)	千句
一四八二(文明一四)	万句
一五〇四(永正一)	百韻
主催者	
刑部大輔教通(通直)	刑部大輔教通(通直)
刑部大輔教通(通直)	刑部大輔教通(通直)
刑部大輔通宣	刑部大輔通宣

● 関連施設紹介 ●

大山祇神社

大山祇神社は、愛媛県越智郡大三島町宮浦にあります。大三島は芸予諸島の中心に位置し、平安時代以降、内海航路をおさえた水軍が活躍する場所でもあり、たびたびここを舞台として海戦も行われました。戦勝祈願や戦勝御礼の奉納品が多数伝わっており、全国の国宝・重要文化財の武具・甲冑の約8割があることでも有名です。また、大山祇神社は河野一族の氏神であり、壇ノ浦合戦で活躍した河野通信が奉納したという鎧も伝えられています。

現存する274帖の法楽連歌も重要文化財で、文学史の中で、地方連歌の成立や発展がわかる貴重な資料であるといわれます。室町時代中期には河野氏一門や時宗僧が、室町時代後期には大山祇神社宮司の大祝氏や海賊衆村上氏などが活躍していました。大山祇神社法楽連歌は、室町期の伊予国守護河野氏の文化的な一面をうかがうことのできる資料でもあるのです。



大山祇神社

●ボランティアガイドの声

当資料館には、来館者に対して資料館や園内の復元区域を案内するボランティアガイドがいます。多くの来館者に接する中で、毎日さまざまなエピソードや心温まる出来事などがあり、ここではボランティアガイドより生の声を紹介します。

開園イベント参加のガイド（男性・60代）より

この日は、湯築城の復元区域の東にある遮蔽土塁^{しよへい}でガイドをしていました。湯築小学校、道後小学校の5・6年生の方々が、内堀の巨石の前で詠んだ俳句を私たちの所に持ってきて、1句完成すれば宝探しの合い言葉を教えました。

子供たちと笑顔で言葉を交わしたのが、非常に印象的でした。子供さんの句は、ありのまま表現しているため、好印象を受けました。その点、年令のいっている者の詠んだ句は、無理な表現をするため、どうしても内容が「句」にならず、「苦」になっていると思われます。俳句王国として、一般の来園者にも俳句を投句していただき、我々も勉強したいと思います。

湯築城 ガイドの一人に 我誇り



●湯築城の自然ひとコマ●

湯築城資料館裏には、ひときわ大きくそびえるクスノキがあり、樹齢は約400年にもなるといわれます。

400年前というと、この湯築城が廃城となったころにあたります。このクスノキは、廃城から現在までの湯築城の歴史を知る生き証人でもあるのかもしれない。

<<利用案内>>

- 公園
常時開園（24時間OPEN）
入園料無料
- 展示施設
入館料無料
9時～17時
休館日/毎週月曜日（休日の時は翌日）
12月29日～1月3日

館長より

春らん漫の4月に開園した道後公園も4か月が過ぎようとしています。湯築城跡は、去る6月21日に、国の文化審議会から文部科学大臣に国史跡として答申され、秋には正式に指定される見込みです。皆様の御来館をお待ちいたしております。

編集後記

オープン後3か月で、来館者は3万人を超え、反響の大きさにスタッフ一同うれしい悲鳴をあげているところに、「湯築城跡、国史跡へ答申」のニュース。この遺跡の魅力や価値を伝える責任をますます重く受け止めています。このたび創刊された「湯築城だより」によって、湯築城や中世に関する情報を提供し、より一層親しまれる資料館となるよう頑張っていますので、よろしく願いいたします。(S)

湯築城だより 創刊号

編集・発行 湯築城資料館
〒790-0857
愛媛県松山市道後公園
TEL 089-941-1480
FAX 089-941-1481